みやぎ復興つうしん

H24 11月号

発　行
社会福祉法人　宮城県社会福祉協議会
宮城県災害・被災地社協等復興支援ボランティアセンター
〒980-0011
宮城県仙台市青葉区上杉1丁目2番3号 自治会館2F
TEL: 022-266-3952　FAX: 022-266-3953
URL: http://msv3151.c-bosai.jp/

宮城県社会福祉協議会
第1回 被災地の地域福祉活動指針（ガイドライン）策定委員会

10月29日(月)第1回委員会を開催いたしました。

委員会に先立ち、県社協会長の三浦より委嘱状の交付、主催者挨拶の後、委員長に東北学院大学の阿部重樹さん、副委員長に、仙台市社会福祉協議会の髙橋健一さんが選出され、事務局から事業の主旨を説明させていただきました。

第2部ではこの検討委員会の大きな柱となる3つのテーマについて、4グループに分かれて課題から提案までたくさんのご意見をいただきました。

3つのテーマ

- Ⓐ 緊急期の災害VCの運営やNPO等との連携や協働による活動のこと
- Ⓑ 仮設入居からの生活, 在宅者やみなし入居者への支援と地域コミュニティでの相互扶助活動(の再生)などのこと
- Ⓒ 市町村社協としての住民の相談支援事業に関して

最後に、委員長の阿部重樹さんより、日頃の顔の見える関係構築の必要性、財源確保のノウハウ、多様な団体組織をコーディネートするキーパーソンの必要性が多くのグループで課題としてあげられたほか、みなし仮設住宅への支援をどのようにしていくのかというのは平時の地域支援と連続していく、というお話が共通して出ており、共有できたのではないかとの総括をいただきました。

現在、今回の委員会で出していただいたご意見と、各市町村社協の皆様にご回答いただいたアンケートをもとに、第2回委員会の準備を進めております。

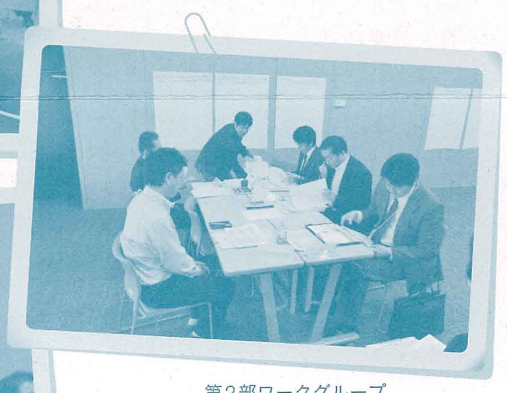
第2回委員会では、今回話し合いをした3つのテーマのAについて深めていく予定です。

皆様の忌憚のないご意見をいただきながら、実りあるガイドラインを作っていきたいと思いますので、ご支援ご協力のほどお願い申し上げます。

会長挨拶

委嘱状交付

第1部


第2部ワークグループ

阿部委員長よりまとめ

column

作品展 ～復興への願い～

10月10日・11日、仙台市福祉プラザにて『作品展～復興への願い～』(仙台市社会福祉協議会中核支えあいセンター主催)が開催された。きっかけは、支えあいセンターが個別訪問に伺った先でのこと。震災の悲嘆や無力感を克服するため、趣味活動や創作活動を通じ、前向きな気持ちで生活再建に取り組んでいる被災者の方々を知り、発表の場をつくろうと企画した。絵画や手芸品など、55名のみなし仮設入居者の作品はどれも力作で、多くの人々に感動を与えた。

今月の「人」

やまもと復興応援センター　主事

髙橋　克彦 さん

今年5月から事務局で地域福祉を学んだのち、9月からやまもと復興応援センターの主事として勤務する髙橋克彦さん。生活支援相談員のサポート、全体の取りまとめが主な仕事だ。出身は隣の角田市、地元で仕事がしたかったため、この道を選んだという。

「活動を通じて感じるのは、『仕組みづくり』の大切さです」。髙橋さんは以前、重度障がい者施設に勤務していた。「そこでは直接的な支援が求められていましたが、センターの仕事はそれだけじゃない。被災者の方が自分の足で進んでいけるような、そんな仕組みをつくること、環境を整えることも大事なのだと思います」。

また、活動を通じて、印象に残ったエピソードを語ってくれた。「日帰り温泉ツアーを開催した時、参加された方から『俺たちは健康だから来れる。(たとえば)足が悪くて参加を遠慮している方たちへの支援を手厚くしてほしい』と言われたんです。それは地域福祉全体に通じる精神です。今回の震災があってもなくても、多くの人は、支えあいの心を最初から持っていたのだと感じました」。

最後に、ともに働くセンターのスタッフへ、そして他地域の方々へメッセージをくれた。「直接支援と自立支援の両方が求められる難しい時期ですが、力を合わせていきましょう。そして、山元町は気候の穏やかな、とても良いところです。のんびりした暮らしを望む方は、ぜひいらっしゃってください」。山元町の温かさ、おおらかさが伝わってくる、髙橋さんのお話だった。

被災地の取り組み みやぎ～絆～smile

仙台市

発災当初の混乱から、しだいに落ち着きを取り戻した仙台市。仙台市社協が運営する中核支えあいセンターは現在、借上げ民間賃貸（みなし仮設）居住世帯の支援として、常設・巡回相談所の設置、高齢者世帯などの個別訪問、ふれあいサロン活動や交流イベントなどを行っている。

活動を通して感じられるのは、住民の二極化だ。震災が過去のものになりつつあるなか、自立して新しい生活環境になじむ人もいれば、悩みを抱えたまま、進む先を決めかねている人もいる。沿岸部から避難してきた被災者が住民票を移すことをためらうのは、故郷に戻りたい気持ちの表れだという。また、就業面の問題も世代問わず深刻化している。応募職種にかたよりがあり、培った経験を活かせないなど、希望する仕事に結びつきにくいのが現状だ。

「今は立ち止まっている方々についても、いずれ自立した生活を取り戻していけるように、地域全体で支えあう体制づくりを目指しています」とは主任の髙橋秀仁さん。そのためには、サロン活動などを通じて被災者の方々と地域とのつながりが深まっていくこと、ゆくゆくは交流の場づくりを地域住民が引き受け、根付いていくことが期待される。住民同士の支えあいは、センターだけでなく、社協全体として取り組んでいる課題だ。

支えあいセンターたいはくの生活支援相談員の阿部さん、福田さん、沼田さんは、心に残ったエピソードをいくつか語ってくれた。「サロンの常連さん同士が連絡先を交換しあって友だちになったり、口コミでサロンの参加を呼びかけてくれたり、つながりの輪が広がることは私たちにも嬉しいことです」。印象深かったイベントは10月10日・11日に開催された『作品展～復興への願い～』だ。55名のみなし仮設に暮らす方々が制作した手芸品などが集まり、多くの人々から好評を博した。また、9月に開催された南三陸町社協と共催の『南三陸町再会さろん』に続き、12月には気仙沼市社協と共催の『気仙沼市はまらいんや交流会』も予定されている。他地域からの避難者も多い仙台市だけに、同郷サロンは期待も大きく、いつものサロン以上のにぎわいを見せる。

さまざまな人たちが、互いに支えあってきた一年八ヶ月を髙橋さんは振り返る。「復興が進んできた雰囲気のなかで、『自分は忘れ去られてしまう存在なのではないか』と不安に思う方に、私たちは決して忘れていないと伝えたい。支えあいの取り組みがもっと広められるように、地域の方々と連携していきたいです」。

中田サロン活動の様子

仙台市社会福祉協議会
中核支えあいセンター
仙台市青葉区五橋 2-12-2
TEL:022-217-7234

山元町

「今回の震災を受けて、住民間で支えあえるような仕組みづくりを目指しています」とは、やまもと復興応援センター主事の髙橋克彦さん。災害復旧ニーズはほぼ収束し、生活支援へと移行しているやまもと復興応援センター。主な活動内容は、仮設住宅への個別訪問を中心とした見守り、各仮設集会所で週1回のお茶会サロン開催、みなし仮設への支援（電話による安否確認、聞き取り）など。サロン活動については住民の主体性を大切に、それぞれが好きなことを楽しむ憩いの場になっている。

住民や町の現状について、「難しい時期です」と髙橋さんは言う。「住民の方も表面上は明るく前向きになっているように感じますが、本当の気持ちはわからない。デリケートな問題なだけに、話をする時はまず、聞き役に徹し、注意深く交流をはかるよう努めています」。また、支援内容も転換期にさしかかっている。「直接的な支援から、住民主体に向けての自立支援へ。いずれ住民が自立できるような仕組みづくりは、大きな課題でもあり、やりがいのある仕事です」。

町内も徐々にではあるが活気を取り戻している。11月23日に開催された『心をひとつに！山元町ふれあい産業祭』では、全国30市町から地場産品等が寄せられ、チャリティー販売を行った。やまもと復興応援センターもブース参加し、仮設住民が自分たちで手作りした手芸品を販売してもらう場となった。また、町内の各仮設住宅ごとに『日帰り温泉バスツアー』を企画、住民・生活支援相談員が参加し、順次、福島県穴原温泉へ行っている。12月14日には、みなし仮設居住者を対象に、福島県会津若松市への日帰り温泉ツアーを予定している。

山元町の住民へ、髙橋さんはメッセージを寄せてくれた。

「この度、大震災により被害を受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げます。やまもと復興応援センターで、個別訪問をしている生活支援相談員さんは人生経験、知識が豊かな方たちです。お気軽にご相談ください」。

やまもと復興応援センタースタッフ

活動写真の展示

山元町社会福祉協議会やまもと復興応援センター
亘理郡山元町浅生原字作田山 32
TEL:0223-35-6223

南三陸町

震災から約1年8ヶ月が過ぎ、ガレキもだいぶ整理された道路に復興への兆しを垣間見る一方、「これから」と思わせる光景が広範囲のエリアに広がる南三陸町。

南三陸町災害ボランティアセンターには、町民から「家の片付け」や「ガレキ撤去」、さらには「通学路を清掃する作業」や「街路灯の設置作業」、「漁業支援」、「農業支援」などの復旧系の作業依頼が現在も寄せられている。ニーズ件数は減少傾向にあるものの、県内外から集まってくれる多くのボランティアが大きな力になっていることは変わっていない。

平成24年11月現在、南三陸町の仮設住宅は町内外58ヶ所に設置されており、2,195世帯が入居されている。南三陸町社会福祉協議会では6ヶ所のサテライトを設置、生活支援、精神的な支援にあたると共に、前述の災害復旧系のニーズ対応や仮設住宅の集会所でのイベント、サロンのニーズなどに対するボランティアのマッチングの役割も担う。懸案されていた社協の福祉分野の事業活動に関しては、小規模なデイサービス施設を平成25年2月に開設予定、同様に戸倉地区にも今年度中の開設を予定している。

また、南三陸町の支援活動の特徴のひとつに、企業と社会福祉協議会、災害ボランティアセンター、そして行政の密接な連携による復興支援活動があげられるだろう。震災直後から支援を続けてくれる企業は復旧・復興の段階に合わせて支援の形を変え、また新しい企業が段階に合った支援を申し出てくれるなど、企業が町の現状を調査・解析して支援内容を提案するという、新しい支援モデルが形成されつつある。

「以前はお金、物資、人的支援でしたが、それがソフト、ノウハウ、技術へとさらなる広がりをみせている。今年が『企業ボランティア元年』といわれる理由がここにあると思います。私たちもそのノウハウや技術を活用させていただいて、将来を見据えた支援活動を続けていくつもりです」（南三陸町社会福祉協議会 総務課長 猪又隆弘氏）。団体・個人を問わず寄せられてくる支援を、常に最大限受け入れ、活用してきた南三陸町社会福祉協議会の支援活動体制。先進企業のノウハウや技術も活用することは、南三陸町の復興がさらに広範囲に、そしてスピードアップしていくことを確信させる試みと言えるだろう。

林地区漁業支援

波伝谷地区ガレキ撤去

南三陸町社会福祉協議会（南三陸町災害ボランティアセンター）
本吉郡南三陸町志津川字沼田 56
TEL:0226-46-4088

イベント情報

第１回 はまらいんや交流会

日時　平成 24 年 12 月 14 日（金）
10:30～12:00　（受付 10:00～）

場所　仙台市福祉プラザ第２研修室
（地下鉄五橋駅下車２分　駐車場はありません）

お問合せ
仙台市社会福祉協議会中核支え合いセンター
TEL: 022-217-7234
気仙沼市社会福祉協議会ボランティアセンター
TEL: 0226-22-0722

気仙沼市
社会福祉協議会から
伺います